

第10編 自由独立そして建国の戦い

(ジャラモギ オギンガ オデインガの英雄的生涯—そのⅢ)

1960年1月、ロンドンのランカスター＝ハウスで、新任の植民地相マクラウドの主催によるケニア憲法会議が始まった。当時のイギリスの首相マクミランは、植民地政策の大きな変革を決意していた。マクラウドは、アフリカ人多数支配を受け入れることを目標に積極的に調停活動を行い、過渡期として多人種構成を受け入れることはあっても、近い将来、共通選挙名簿による選挙を行なって、多数支配の政府を樹立するという解決案に踏み切り、アフリカ人代表とヨーロッパ人入植者の代表でアジア人やアフリカ人をも含めた多人種協調主義を掲げていたニュー＝ケニア＝グループ（後のNKP＝New Kenya Party）の同意を取り付ける事に成功した。同年3月27日キクユ、ルオー、カンパの3大部族の支持を集めるKANU（Kenya African National Union）が設立され、一方、6月には遊牧民の諸部族や海岸地方の小部族を糾合してKADU（Kenya African Democratic Union）が設立された。KANUは集中的な執行体制をめざし、ケニアッタを将来の党首として想定していた。KADUは、少数部族の擁護の為の連邦制を主張し、マジンボ（Majimboism＝地方分権主義）と言われた。KADUは、後にKANUに吸収されるが、その代表的な人物は、モイ（その後第二代大統領となった）であった。

(5) 自由独立への躍動 1960－1963

ランカスターハウス会議

1960年のランカスターハウス会議は、ケニアの植民地解放の歴史の中で主要な転換点であった。この時、ケニアの政治的独立が、明確な可能性を持って示されたからだ。オデインガは積極的な会議の参加者であったし、燃えるようなアフリカのローブを着ていた。

KANUの成立

この年（1960年）の第二の主要な出来事は、キアンブでの会合であった。

これはKANU（Kenya African National Union＝ケニア・アフリカ人民族同盟）の誕生であった。初代総裁はギチュルで、オデインガは新しく生まれた政党の副総裁（VP）に選ばれた。オデインガは、この党の妥協のない信条である「ケニアッタの解放を通じてケニアの独立を勝ち取ろう」の守護者であった。KANUの最初の試練は、1961年の選挙であったし、そこでオデインガは彼の中央ニャンザの議席を守らなければならなかった。

1961年の選挙

1961年の中央ニャンザの選挙では、オデインガはLUTATCOとルオー組合とラ

モギ紙のもともとの「組織票」と、中央ニャンザの2つの新勢力を駆使した。一つは新聞ニャンザタイムズで、1956年11月にオデインガの手で復活した新聞だったが、ルオー一語と英語で印刷された週刊誌で忠実な民族主義者の新聞だった。この新聞は、オデインガの民族主義者としての基盤ともなった。もう一つは、中央ニャンザアフリカ地区協会であった。1956年にオハンガによって立ち上げられたが、今やオデインガの補佐役であるデイクソン マカセンボが会長となって、経営されていた。1957年から1961年にかけて、協会は、反植民地主義、ケニアの民族主義そして汎アフリカ主義を擁護して活動していた。この協会とニャンザタイムズ、ラモギ紙の組み合わせは、民族主義者の主張を中央ニャンザの表舞台に押し出した。これらの紙誌の読者たちは、多くの無学の人々に市場や路傍でその主張を噛み砕いて教えてやった。その主張とは、オデインガの立法府での植民地主義者たちとの論争についてであった。1958年以來のケニアッタの指導力、エンクルマの汎アフリカ主義、ユーゴのチトーやソビエトの外相グルムイコ、毛沢東や周恩来等のコミュニスト達との交友等についてであった。新聞紙上での論争は公然たるものだった。1961年に、協会は、その組織を「中央ニャンザKANU支部」と改め、その指導力、組織、オデインガに従う大衆を、オデインガが副会長を務める民族主義団体（KANU）に引き継ぐことになった。

主導権を争って

中央ニャンザの選挙結果は圧倒的にオデインガの勝利だった。この選挙は、オデインガにとって民族主義指導者としての重要な一哩塚となった。最初の間、彼は他の選挙区の選挙に急進的で強力な民族主義候補を支持して影響を与えようとした。このグループは、KANUにあって派閥を形成し、自らギンガーグループと名乗った。彼らは、「党は、純粹にアフリカ人の利害にたいし忠実であり続けなければならないし、アフリカ社会主義と統一アフリカの理想の実現に自らを捧げなければならない」と主張していた。しかし、彼らは、ハイランドの土地にたいする補償に関し、ムボヤやギチュルの影響も受けていたし、補償の実現の前提は、KANUの政権樹立であると主張していた。オデインガのグループは、ムボヤとギチュルがケニアッタの釈放に煮え切らないと疑っていた。ここに、1957年の選挙で最初のアフリカ人選出議員となった2人のルオー族出身者である、ナイロビ地区のムボヤと中央ニャンザ州のオデインガが、KANUの主導権をめぐる、ギンガーグループを巻き込んで、各地の選挙戦を展開することになる。

南ニャンザで、オデインガはローレンス オグダを支持してムボヤ側のサムエル アヨドに対抗した。この選挙ではアヨドが勝った。ナクルの町は、ムボヤとオデインガが競争したもうひとつの選挙区であった。ここでは、オデインガはルイア族の労働者の指導者であるアチュール オチワダを支持し、ルオー族で元マウマウ団の勾留者であったゼパニアムアンギに反対した。ムアンギはムボヤの支持を受けていた。またギクユ族でギチュルの

支持を受けたゲタタにも対抗した。

最も鋭く対立した議席は、東部ナイロビであった。そこではオデインガは、KANUのナイロビ支部長であったムニユア ワイヤキを押し、トム ムボヤその人に対抗した。ワイヤキは今やルオー族ではなく都会の労働者であるキクユ族の支持を受けていたムボヤを全キクユ族の前で打ちのめそうとした。この試みは、中央州のKANU指導者であるエンジョロゲ ムンガイによってKANU内部の対立を避ける為に抑えられた。鍵になる争点は、ムボヤのケニアッタの指導力に対する忠節さであった。ケニアッタが釈放されたならばムボヤは失脚するのか？ムボヤは、忠節を誓って見せた。彼はワイヤキとギクユの票を争い、圧倒的に勝利した。これはムボヤにとって苦しい試練であったが、全キクユ族が彼に票を投じ、彼のケニアの民族主義運動の中心的位置を確たるものとした。

マジンボ（地方分権主義者）との戦い

境界がほぼ引かれた。ムボヤもオデインガも今やKANUの内部で政治的に反対の極に立っていた。1961年8月14日にケニアッタの解放が実現した時、ケニアッタは最初の2年間オデインガと共にあったが、それは、オデインガが、彼の解放を要求し続けてくれた借りがあるとの明らかな感情が背景にあった。しかし、イギリス政府がマクドナルド総督を通じて、ケニアッタに対して「オデインガの急進的行動を懸念する」とか「オデインガを抑えるように」との警告がなされ始めたのは、まさにこの時期であった。

1961年と1963年の間に、自由独立の課題は重要な局面になった。主要な役者は、政党であった。一方ではKANUがあり、正当な民族政党で汎アフリカ主義と社会主義を擁護してきたし、強力な中央政府を組織することを主張し、教育、健康管理、土地活用、産業化を推進するという主張だった。もう一方は、KADUで、「少数民族の恐怖」にその支持基盤を置いていた。オデインガは、KANU急進派として活動していた。

1961年から1963年までの3年間は、KANUとKADUの闘いとなった。エンガラ、ムリロ、モイ、トウェットそしてオコンドに率いられたKADUは、マイケルブルンデルの新ケニア党（New Kenya Party）やアルビンド ジャミダールのケニア・インド人会議派（Kenya-Indian Congress）の全面的支援を受けていた。KADUの主張は、「地方分権主義」(Regionalism=Majimboism、マジンボ)の考えを擁護することであった。これはKANUの「中央集権主義」に対抗する考え方として提案された。KADUは、1961年10月から、ケニアを7分割することを主張した。個々の地方が、大統領、政府、地方議会、公共委員会、警察、徴税権などを持つ事になる。彼らはスイスからゼルウェファー博士を雇い憲法草案を用意しようとした。彼らの雄弁は、覚醒の感があった。「地方分権か、はたまた市民戦争か」という言葉は、地方部族の長であったウィリアム ムルゴー

をおびえさせた。彼はカレンジン（Kalenjin）の種族の男たちに戦いの準備をさせ、合図の笛を待つように命じた程だった。合図とは市民戦争の開始を意味した。このデイベートの頂点では、1963年中期に、KADUの国民会議の会長であったモイ（Daniel Arap Moi）がリフトバレイの地方議会の大統領に選出された。彼は「地方分権主義」が独立憲法に盛り込まれるのを見るまで戦うと言明した。KADUの指導者たちは、「分離派リフトバレイ州」を設けると脅かした。そしてモイは、1963年10月までに、リフトバレイ地方が自身の旗をたなびかせ、ロンドンで紋章を許されるべきだと主張し続けた程だった。

KANUの指導者たちは、KADUによって国家の主権が脅威に晒されていると理解した。KANUの解決策は、1963年の5月の選挙にむけて、強力な組織を作ることだった。その選挙は、1963年6月1日のマダラカに先立つものだった。オデインガは、この活動に打ち込んだ。はじめから、彼は「地方分権主義」を信用していなかったし、マジンボの言葉が州と地方と地区を包含していることを問題にしていた。

1962年に憲法議会に発展する議論の中で、また再び1963年の選挙戦の中で、オデインガの声が激烈に響きわたった。公衆の集会で、また立法府の中で、そして特にランカスターハウス会議の席で、彼は叫んだ。「マジンボは、ケニアの独立を脱線させる為の、入植者たちや欧米列国達の策略である」と。

（6）建国の戦い 1963—1969

KANUの勝利と自由独立の達成

1961年8月、ケニアッタは、遂に9年間に及ぶ辺境の幽閉生活をとかれて、故郷のキアンブに戻り、KANUの総裁に就任した。

1962年2月には、第二回目のランカスター＝ハウス会議が開かれ、独立の準備を整える最後の段階の仕上げにはいった。

1963年5月には、ケニアで初めて全議席に対し一人一票の原則による総選挙が行なわれ、KANUは地すべりのような大勝利を得た。翌月ケニアッタを首班とする内閣が組閣され、KANUによる多数派内閣の下に、1963年12月12日独立を達成したのである。

1964年12月、中央集権的改革を盛り込んだ新憲法が制定され、同時にケニアは、イギリス総督を廃して、英連邦内の共和国となり、ケニアッタが大統領となった。

この時期に、KANUからKADU指導者の一部に新内閣への入閣の誘いがあり、自党の拡大を望めないと判断した野党のKADU議員は、党を解散して全員KANUに入党する道を選んだ。そして、密かなオデインガグループに対する包囲網が張られ始めていた。

KANU内部の亀裂

オデインガは、内務大臣になった。更に一年後、副大統領に任命された。彼も支持者たちも、彼がケニアで2番目に重要なポストについたものと喜んだが、直ぐに失望することになった。ケニアッタは、彼を内務大臣の仕事に押し込めたからだ。権限を与えられず、オデインガは刑務囚人と移民の担当にされていたが、警察や行政を担当するわけではなかった。ケニアッタと彼の側近であるエンジョロゲ ムンガイやチャールス エンジョンジョは、明確にオデインガを権力から遠ざけようとしていた。同時にケニアッタは、オデインガのライバルであるトム ムボヤに接近した。ムボヤは、特に彼が幹事長の地位にあるKANU党を牛耳ることに熱心であった。代わりに、オデインガは、ムボヤから労働組合に対する影響力をもぎ取ろうと狙っていた。彼は労働組合運動が余りに英米の組合運動に直結しすぎているという見方をしていた。ムボヤはムボヤで、オデインガが共産主義者でソ連や中国の友人であると見ていたのだ。

オデインガとムボヤの競争は、そのまま市民社会にも持ち込まれた。ムボヤは、ルオー組合からオデインガの影響を除こうとしたが、1965年に逆に、オデインガの支持者によって、オデインガを「組合の指導者である」と宣言されることになった。ムボヤは同時に、ルオー組合のフットボールクラブでの指導力を確立しようとし、支持者のスポンサーとなり、キスムホットスターというクラブを立て、競争するように仕向けた。この競争相手同士は、しばしば、ナイロビのイーストランドでやじりあい、石をなげあい、争うようになった。ムボヤは、ルオーの人々がオデインガ（老練なる政治家）を尊敬しないように画策したのだ。この結果、ルオー族のなかに、オデインガ支持派とムボヤ支持派が生まれた。

1964年から1966年にかけての時代は、政治的に極めて苛烈な時代でもあった。議会でも、オデインガは、急進的な指導者であるビルダッド カギアと組み、ムボヤグループには、モイやジェレミアー ニャガアやブルース マッケンジーが加わった。彼らは、オデインガのグループに比較して、穏健であると看做されていた。主要な争点は、独立政府が進めるべき今後の政治方向についてであった。

ケニアッタとムボヤのチームは、植民地主義から独立への漸次的変化を主張していた。大規模入植者の農園は、政府が買い上げ、土地を持たないアフリカ人は、土地を国から買い受けるという政策を支持した。彼らは西側との密接な関係を促したし、とりわけ西側からの援助を求めた。更に経営者の利益にたった組合のあり方を政府に求めた。オデインガたちは、全て反対に回った。彼らは、(元)マウマウ団の戦士に対し無償の土地と即時補償を、土地の無いものに対し無償の土地を、大企業の国有化を、被雇用者の生活改善をめざす活発な産業別組合主義を主張した。

この食い違いはその当時競われていたイデオロギーの相違を反映していた。つまり西側の資本主義と東側の社会主義である。冷戦をすすめる国々は、ケニアでのデベートに関心をしめし、物質的にかつ資金的に夫々を支持したのである。

リムル大会の分裂

ケニアッタは、1965年の半ばまでに、一つの政治書簡の合意を議会に促しつつ、デベートを終わらせようとした。これは第10書簡（Sessional Paper No-10）或いは「アフリカ社会主義とそのケニアに於ける計画の妥当性」であった。しかし、オデインガのグループは、それを不十分として拒否した。この間、オデインガは、遊説し、キスムに下り、合同高等学校で演説し、またモンバサに下る等、政府の政策から彼自身を切り離そうとしていた。一方政府は、彼とそのグループを新聞やラジオで、「外国の追随者」として追及した。議会の中のあるグループは、ケニアッタに、オデインガを内閣から追放するように促した。彼らはナイロビのコーナーバーで集まっていたので「コーナーバーグループ」と呼ばれた。このグループには、内閣の大臣であるギチュル、ニャガア、エンガラが入っていた。更にアメリカ大使であるアトウッドが、過激派を組合の指導部とKANU党から放逐するように政府を促した。結局、ケニアッタとムボヤの枢軸によって、次の党会議で、「過激派」と彼らが呼ぶ者達を一掃することを決定するに至った。これが有名な1966年のリムル大会であった。ケニアッタとムボヤの一団は、あることを受け入れた一団であり、多くの反対にも拘わらず、その考え方を押し通すことを決定していた。その一撃はオデインガの頭上に下ろされ、彼のKANU党の副大統領としての地位は打ち消され、代わりに、後に州となる6の地域とナイロビを代表する7人の副大統領が取って代わった。

KPU（The Kenya Peoples Union=ケニア人民党）の結成

オデインガのグループは、直ちに新党を結成することを宣言し、議会から退くことになった。オデインガは、副大統領と大臣のポストを退いた。アチング オネコもまた情報放送大臣を辞した。議会内での政府の反応は、更に早かった。トム ムボヤが動き、憲法を修正し、「KANUを脱党した者全て、KANUの切符で選出されていたのだから、その選挙区へ帰り、改めて信任を受けねばならない」と宣言した。一方、オデインガの党は、KPUとして登録されたが、26の選挙区で再選挙戦に直面することになった。

KPUとKANUの戦い

KPUの発表した政策は、KANUとの違いを的確に述べていた。KPUは、土地の大きさについてある天井を設けることを主張していたし、土地のない者の即時再入植を求め、アフリカ社会主義を主張し、かつ（中立）非同盟政策を支持した。彼らは、無償の教育と医療を約束したし、小売商人の為にローンを求め、孤児の為に援助を求め、弱い人々の要求を取り上げた。一言でいうと、「一般大衆の政策」であった。しかし、選挙戦の過熱状況

で、それを宣伝するには、障害があった。事実、選挙は、「オディングカケニアッタか」という事で戦われた。結果として、KPUはオディングの議席を含めても9席しか取れなかったし、これらのうち7議席はルオーの土地の議席からだった。

議会内で、議長のハンプレイ スレイドは、KANUとKPUが全く異なる政策を掲げていることを承知していたし、オディングに公式に野党を形成することを許した。オディングは、野党の指導者となった。

議院の中では、小さなKPUの少数派が、KANU政府にとっていつも油断できない相手になった。ダイバートの幾つかは、経済政策についてであった。KPUのトム オケロ オドンゴは、企画大臣トム ムボヤに食い下がった。オディングは、公的資金委員会の会長として、その能力を遺憾なく発揮した。彼は、毎年、監査役の報告を材料に、正確な調査を要求した。政府による公的資金の誤謬使用を牽制した。議会の外では、政府はKPUを抑えられなかった。政府は、KPUを扇動的な政党（ケニアッタの言葉では“カメレオン”）であるとし、集会の許可を与えようとしなかった。3年の間、KPUは、州政府や、族長や警察の執拗ないじめにあった。多くの集会はキャンセルされ、あるいは、警察によって追い立てられた。地方の指導者たちは、警察に詰問された。KPUを支持する集会は、許可を取り消されたし、申請すら取り消された例があった。政府は、ラジオやテレビを使って、意図的にKPUに反対を煽る宣伝をした。かなりの指導者層が、何度となく、違法集会の疑いで逮捕された。中央ケニアでは、政府は、KPUをルオー族の党と看做し、色々な民族的な悪感情を喚起しようとした。圧力は個々人の上に厳しく押し掛かり離党を促し、遂にオプロン、ゼファニア アンイエニ、ビルダッド カギアのような幹部達までが、1968年～1969年の間に脱落していった。

東アフリカの大学では、オディングと彼のチームは、大衆の代弁者として人気を集めた。マケレレの学生、ナイロビ、ダルエスサラムの大学や短大の学生は、意識的にオディング達を学園に招いた。1968年に、政府は、オディングがナイロビ大学の中で演説することを禁止しようとしたが、学生達は、断固自由に演説をする権利を擁護したのだった。ロンドン、モスクワ、東ベルリンでの学生運動は、KPUを支持していた。ナイロビの街頭でも心ある人々は、熱心に党の運命を追尾した。しかし、結局は、KANUが勝った。

KANU勝利の背景とKPU弾圧

KANUは、政府そのものであったから、ケニアッタの言葉を借りれば、「あらゆる反対派を『つぶす』ことを政府がきめたから、勝利したのだ」と。「国の力をそのために動員した」と。1968年に、政府は、KPUの指名した地方政府の選挙候補を、すべて失格であると宣言した。理由は、全国で指名の書式に適切な署名を欠いているからというものだ

った。議会選挙は、その年やはり、満期であったので、K P Uは、包括的なマニフェストを公表した。つまり“ワナンチ宣言”である。しかし、政府は、選挙を一年間繰り延べにしてしまった。そして、K P Uは1969年の選挙に参加することはなかった。

K P Uと「キスムの騒動」の顛末

K P Uは、「キスムの騒動」の後、非合法化され、指導者達は、投獄された。この騒動は、オディングアの要請で、ソ連によって建設された新ニャンザ病院の開所式にケニアッタが現れた時に勃発した。ケニアッタが群集に向かって語り、かつオディングアを脅迫した。オディングアが、言い返した。警察が催涙ガスを発射した。何発かが群集に向かって放たれた。公式に13人の死亡が発表されている。オディングアと彼の同志達は、拘置された。オディングアやルク オボク等数人は、一年後に返されたが、他のアチエング オネコやワソンガ シジェヨ等は、8年から9年に亘って夫々拘禁された。これによりケニアは名実共に「一党支配の国家」となった。

オディングアとK P Uの教訓

オディングアは、この3年の間の、K P Uの経験と教訓を噛み締めた。

第一は、多党制は、過去も現在もケニアの生きた選択肢であるということ。K P UとK A N Uは、全く異なるイデオロギーと政策を持って共存していたという事実である。第二は、しかし、反対派の自由を奪ったのは、国家そのものであったという事実である。

オディングアの副大統領の在職は、彼の公的な挫折にもかかわらず、身近に、国家権力を観察し、公的な機能を尊重する機会を与えてくれた。また彼は、身近にケニアの人々を見、広く分析することを覚えたし、ケニア人についての特徴ある明確な意見を持つことができるようになった。このことは、後になって、彼が、特定の公人を評価するうえでしばしば役に立った。彼は、キスムの新ニャンザ病院（ソ連の援助プロジェクト）に戻ることができたし、ナイロビに都会型財産を取得し、銀行の中にしかりとした金融基盤を確保した。これは、1970年代からの彼の活動の経済的な基盤を形成するものであったし、政治活動を押しつぶされていたオディングアのもう一つの持ち味である経済面での才能を発揮し、ルオー族を始めとする彼の支持者の為に貢献する道を開いた。

（次号に続く）

オリジナル文献

Makers of Kenya's Historey “Jaramogi Oginga Odinga”

(E.S.Atieno Odhiambo, Series Editor: Prof. Smiyu Wandibba)

参考文献

世界現代史 14 アフリカ現代史Ⅱ 東アフリカ 吉田昌夫 著